



# 山椿

Yamatsubaki 83

Noboru Nakagawa

中川 登 (19期)



身分証は大会のもの。服装は私服。

私は2020年東京オリンピックとパラリンピック大会のボランティアとして活動しました。

事の始まりは、その前の東京大会、なんと1964年大会の際でした。当時、私は就職先の会社で自分の将来を考えていました。

自省すると、私の中には少々積極的すぎるかと思われるところ(プラス君つまり「P君」と少々消極的すぎるかと思われるところ(マイナス君つまりM君)があります。人生の分かれ目ごとにP君とM君が議論・勝負を経て進路を決めてきました。'64年東京大会の頃は私の中で丁度その議論の最中でした。結果として司法試験の勉強を経て弁護士になり、今日に至りました。

今度の東京大会開催決定の2013年、一生の内で二回本国開催を見るなら「思い出」を残そうと抱負を懐きました。ボランティア募集開始で、いつもの議論が始まり、M君はいい年の私はどうせダメだろう、よって反対。P君は、こんな機会はもう無いから是非応募とのこと。その結果、まず準備を、との決定です。準備の一環は実務では不要だった外国語の検定試験。さて久しぶりの試験勉強、受験と進み、何とか格好のつく結果でした。

応募申込みの理由には込みいっ

た問題を分かりやすく迅速に説明するのが得意、と自分を売り込みました。当たり前ではありますが、私が弁護士になってから依頼者、相手方等を問わず心掛けてきた目標です。その結果か有難いことに組織委員会から応募者の提示と委員会の需要を照らし合わせたマッチング検討の上“field cast”として活躍されたいとの通知を受けました。P君もM君も異議無く受諾です。

コロナの感染拡大で大会は2021年に延期となりましたが、延期後もボランティアとしての意思を変えず、指定された研修会やe-learning等に何回も参加しました。仲間のボランティアは、年齢層、社会経験、得意な外国語(例えばペルシア語)そしてもちろん男女を問わない多岐多才な人材でした。

組織委員会の一部の幹部の男女差別的発言は残念でした。しかし、ボランティア間ではこのための辞退者より、差別解消の糸口と見たボランティア活動継続者が多かったようです。

私の担当は、選手村。各国がその選手団の居住とチーム運営にあたる場所です。ここで我々の大事な活動の一つは、組織委員会事務局と選手団間に言語の相違があってもスムーズな意思疎通の確保を図ることでした。この面では及ば

ずながら一定の貢献ができたと自負しています。

以下のような場面を思い出します。

ヨーロッパの国で自国の言語の他にドイツ語とフランス語を話す人口が多い選手団と話し合う朝、その国の部屋に入る時にドイツ語でグーテンモルゲン、フランス語でボンジュールと挨拶したら、先方も親しみを持ってか、それぞれの国語で朝の挨拶、そして仕事(これは英語)が実務的・円滑に始まりました。

オリンピックに関する贈収賄等は遺憾です。当然ながらボランティアの活動範囲は、大会を支える多くの人々と同様に競技のためにアスリートの環境を最大限整えるべく努力するものです。お金とは縁のない世界です。オリンピックを私利私欲に利用するのは断固排除すべきです。

ボランティア活動は得がたい体験、一生の思い出となりました。

パリ大会でもボランティアを募集することなのですが年齢制限があり、P君もM君も今度は無理ですと意見一致です。 